

海外生活 エッセー

ロンドン事務所

真っ赤な英国のアイコンのゆくえ

(一財)自治体国際化協会ロンドン事務所 所長補佐 野村 美幸 (岐阜県派遣)

旅行に行くと、訪れた地域のアイコンともいえるものがデザインされたグッズを多々見かけますが、皆さんはどのようなものに「英国らしさ」を感じるのでしょうか。ビッグ・ベンや2階建てバス「ダブルデッカー」、黒い帽子の衛兵などが定番ですが、その中には真っ赤な電話ボックスも含まれるのではないのでしょうか。

観光客でにぎわうロンドンでは、あの赤い電話ボックスと記念撮影をする姿がいたるところで見られます。



記念撮影の行列ができるビッグ・ベン近くの電話ボックス

→ 真っ赤な電話ボックスの誕生

英国の街並みに公衆電話ボックスが登場したのは1921年のこと。初代電話ボックスは白い長方形の箱にピラミッド型の屋根を載せたデザインで、ドアや窓枠といった一部のみが赤色でした。アイコンとして定着しているドーム型屋根のボックスは、国王ジョージ5世の即位25周年記念事業の一環として1935年からつくられるようになった「K6 (Kiosk No.6)」と呼ばれるタイプのもので、洗練されたデザインながらも製造費用を抑え、より頑丈で使いやすいよう改良されたモデルです。当初は街並みに溶け込むよう淡色や寒色のカラーリングが検討されていましたが、設置場所や天候などの環境要

因に大きく影響されず視認性が確保されるよう、目立つ赤色が規定色となりました。

→ 時は流れ…第二の人生

最盛期である90年代半ばには、約10万台の公衆電話が設置されていましたが、21世紀に入ると携帯電話の普及などで需要は急激に低下し、維持管理のコストなどを理由に撤去を進める方針が打ち出されました。しかしながら、景観の一部ともなっていたその存在を惜しむ声が大きくなり、現在はその保存活動が行われています。

活動の一部に、通信事業者のBTグループが取り組む「公衆電話ボックス活用計画 (Adopt a Kiosk Scheme)」と呼ばれるものがあります。一定の条件を満たすコミュニティやチャリティー団体などであれば、電話を取り外したボックスが1ポンドで買い取れる仕組みとなっており、2008年の開始から2023年までで5,000を超える電話ボックスがもらわれていったそうです。もらったものは、AED (自動体外式除細動器)ステーションや図書館、カフェやギャラリーなどさまざまな形で活用され、英国全土で第二の人生を送っています。もちろん、緊急時のインフラとして未だ現役で活躍しているものも存在します。

世界中の人に愛される英国のアイコンとして、赤い電話ボックスは、電話という存在を超えて、今後も人々の生活シーンに彩りを添えてくれそうです。



コミュニティのミニ図書館となっている電話ボックス